20年に1度の伝統民俗行事　第2号　平成23年1月15日発行

伊勢のお白石持（しらいしもち）

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

編集発行・御遷宮対策委員会
伊勢市岩渕1-7-17(伊勢商工会議所内)
電話0596-25-5215

お白石の奉献まで凡そ九百五十日。

お白石持という二十年に一度、神にご奉仕する民俗行事が、伊勢人の誇りを育んだ…。

昭和二十八年、第五十九回神宮式年遷宮「お白石持行事」に、周りの賑やかさに包まれながら綱を手にした三歳の子供が、間もなく人生で四度目のお白石を奉献できる幸せを、指折り数えるかのように心待ちにしています。

檜の香り漂う白木の御殿を拝し、お白石を奉る幸せは、なにものにも変えがたい喜びであり、遥か昔の人々とつながるようなひと時でもある、と前回のお白石持行事を振り返り、その思い出を語ります。

奉献まであと二年と半年あまり。伊勢の人々それぞれに、その日の感動と期待に胸躍らせながら、今お白石持行事に対して、着実に準備に励んでみえることだと思いますが、あなたは、あなたの町は、いかがでしょうか…。

温故知新から温故創新へ、そして未来へ

温故知新。古きを訪ねて新しきを知る、という言葉がありますが、今回のお白石持行事に際して、皆さんそれぞれに前回、前々回のお白石持に関する記録や資料を紐解かれ、種々ご検討されていることと存じます。

でも、それは御遷宮の長い歴史から見ればわずか四十年間の出来事。せっかくの機会ですから、もう少しさかのぼってお白石持行事の歴史をたどり、伊勢の先人が神宮に対して抱いていた崇敬の思い、神領民としての特権と責任、などについて考えてみたいものだと思います。

お白石持行事のはじまりは定かではありませんが、「神朝遺文」という古文書に、寛正三年(1462)に行われた第四十回式年遷宮の四年後である、文正元年(1466)三月に奉献の記述があり、また「氏経神事記」には寛正以前からすでに御遷宮ごとにお白石を運ぶことは恒例になっていたという記述もあります。いずれにしても五百五十年以上の歴史を持つ、伊勢の神領民が神宮にご奉仕してきた二大民俗行事なのです。

しかし、このご奉仕は、いつの世も次代へと継承していくために、その大儀と精神を守りながら、それぞれの時代のなかでより意義深い奉献を実施するための改善を積み重ねて、私たちの先人は伝えてきたのではないでしょうか。

それは不易流行の精神ともいえるかもしれません。いつの時代も、曲げてはならない真義に、時代に適合させて運営する知恵を加味して奉献されてきたはずです。

それは、とりもなおさず伊勢人の誇りを喚起することであり、また伊勢の町づくりへの心の集結という大きな力に結びついていったのではないでしょうか。

そのことが、たくさんの参宮者をお迎えする伊勢の町の人々に「おもてなしの心」を醸成することにも結びついていったのだと思います。

歴史に「もしも」はありません。しかし、私たちの先人がどこかの時代に、神宮にご奉仕することの意義を履き違えてしまっていたら、この事業は途絶えていたかもしれないのです。

それだけに、新宮の御前に進みお白石を奉献するという、広く全国の人々が羨むような特権を与えていただいている私たち伊勢人は、それと同時に、無事にお白石をお納めするという大きな責務を忘れてはなりません。五百五十年以上にわたってご奉仕してきた先人の心を受け継ぎ、誇りを持ってお白石を奉献させていただくとともに、六十三回目のお木曳、お白石持行事に、その精神を引き渡す責任も科せられているのです。

お白石持奉献という二大民俗行事を、未来永劫継続していくために、今私たちは何代にもわたる先人の心を訪ねて新しきを知る、いや、新しきを創る、温故創新の精神で取り組みたいものだと思います。

■宮澤正明氏プロフィール

昭和35年東京都に生まれる。
昭和58年日本大学芸術学部写真学科卒業。卒業制作「夢十夜」にて日本大学芸術学会奨励賞受賞。昭和60年アメリカのIP(International Center of Photography)賞、第1回新人賞受賞。世界各地での撮影活動による作品展及び作品集多数開催と出版。平成16年10月、神嘗祭の撮影を機に、伊勢神宮の撮り下ろしを開始。平成21年、講談社100周年記念出版として写真集「伊勢神宮―現代に生きる神話」を刊行。